日蓮宗開拓移民――法華村の成立と現状――

一、新天地を求めて――山梨団体の移民――

高橋　謙祐
（現代宗教研究所員）

一

北海道の近代の夜明けは開拓で始まった。その歴史は、昭和二十五年、北海道開発庁がおかれて工業化を主とする北海道総合開発計画がスタートするまで続いた。その時をもって、農業開発を目標とした、従来の開拓政策は終りを告げたのである。

約九十年にわたる北海道の開拓は、本州の各府県より移住した人びとによって促進されていった。そしてこれらの移民たちによって歴史や文化がつくられ、精神的風土にも大きな影響を与えたといわれる。移住者が入植したところは、開拓の歴史が終った現在、地名となって、その歴史を象徴しているかのように各地に残っている。

それは、字名の改正で少なくなったとはいうが、県名をとったり、あるいは出身地の郡や村の名前をつけたりしたらしい。各種の団体で入植したのも多かったので、そういう時には、その団体名をつけて入植地の名としたところも

多くあったという。それらの命名は、一緒に移住した人たちのこれからの生活への団結の表明であったにちがいない。

ともあれ、こうした地名の一つを、われわれは北海道東部寺院調査で知ったのである。それは、調査の対象であった、足寄郡陸別町小利別にある前啓寺を調査するに及んで、その近くに「日宗」という地名を見出したことである。

北海道に、日蓮宗に関係する地名が残っているのは、函館の恵山の近くに「椴法華村」というところを知りうるが、小利別の日宗については、地元の人たちが知る以外は、全くといってよいほど広くは知られていない。

日宗とは、いうまでもなく、日蓮宗の略称として明治から大正時代にかけてよく使われていた名称である。これを、当時の教誌「日宗新報」に代表してみることができるが、日宗といえば、日蓮宗を指した。

小利別の日宗を知る、地元の人の語るところによれば、日宗は、明治の終り、日蓮宗の人たちが開拓のために移住してきて一集落をつくったので、いつしかこれらの人びとの住む一帯を日蓮宗部落と呼ぶようになり、やがて日宗と略して呼ぶようになったという。その集落は、一名「法華村」ともよばれ、日宗といえば、この法華村を指したのである。

その一角に、入植してまもなく日蓮宗説教所が建てられた。日宗に入った人たちは、この説教所を生活のよりどころとし、心のささえとしていた。時には法華の寺とも呼ばれていた説教所が、今日の前啓寺となっていくのである。前啓寺という寺号は、昭和二十四年に設立認可を得ているが、それまでは、日蓮宗小利別説教所という名称であった。その寺がどういう寺であったか、詳細は後で述べるであろうから、いまは寺号の由来について簡単にふれておく。

現在、前啓寺について知られるところは、「明治四十年代に当時の宗務総長佐野前励が当時の北海道長官河島醇（注、元福岡県知事）より小利別地区の未開墾地三〇〇町歩の払い下げを受け、夕張郡由仁広宣寺広瀬啓宣を団長とし、本宗（日蓮宗）信徒である本州並びに九州の農民で入植、法華村を建設、その信仰の中心とした前啓寺を創立し

た。当時二〇〇余の檀家を有したが時代の盛衰と共に、現在は廃寺同然となっている」（『日蓮宗寺院大鑑』昭和五十六年刊）ということだけである。日宗についても、その歴史や実態については全く知られていない。

われわれは、この前啓寺という寺号こそ日宗の歴史を語り伝えていることを、調査をしていくうちに知ったのである。前啓寺とは、佐野前励・広瀬啓宣亡き後につけられた寺号であるが、山号を甲福山という。広瀬啓宣は山梨県の出身、佐野前励は福岡の出身、そして入植者は主に山梨と福岡の出身であったから、こうした関係から、甲州山梨県の「甲」をとり、福岡より「福」の一字をとって甲福山と命名し、また佐野前励の「前」をとり、入植の団長であった広瀬啓宣の「啓」をとって前啓寺という寺号にしたのであった。それは、日宗＝法華村の人たちが、信仰を同じくする宗教移民の象徴としてつけた寺号だったのである。

いま、日宗には山梨県から移住した二家族の日蓮宗信徒が残っているだけであるが、その人達も代がかわれば、日宗に住むことはないという。そうなれば、日宗は地名のみが歴史を語るところとなってしまう。

以下、日宗と前啓寺の歴史について、知り得たところを述べていくのであるが、ここで、特に日宗＝法華村と前啓寺を取りあげた理由をいくつかあげておこう。それは、

①日宗という法華村づくりは、日蓮宗門の事業として進められたこと。

②開拓を行ないながら、日蓮宗法華村を建設して開教をめざした、数少ない例であること。

③移住の理由はともあれ、開拓の大いに奨励された時期にあって、同じ志をもった日蓮宗信仰者たちが、新しい村づくりの意欲にもえて移住した、貴重な事例であること。

④きびしい自然、立地条件の下で、開拓・開教をめざしたものの、結果は失敗していったことの貴重な体験事例であること。

⑤そして今日、過疎のため村も寺もなくなる一歩手前にあること。

などがあげられる。

その後も、われわれは、日宗と前啓寺について、かつて日宗で生活を営んでいた人、いま日宗にいる人、そして日宗に関わりを持った寺々を探し訪ねて、できうる限りそれらの追跡調査を行なったのである。

二

まずはじめに、当時の全体的な社会情勢については第三章でふれるが、ここでは、日宗の開拓が行なわれた社会的背景と開拓に関連する経過状況について、若干ふれてみよう。

北海道を開拓するにあたって、問題となったのは、開拓者をどうするかということであった。高倉新一郎・関秀志共著『北海道の風土と歴史』（昭和五十二年刊）によると、それは、本州から開拓者を移住させることからはじまった。明治二年に「移民扶助規則」という移民の制度が定められて、まず、明治維新で失業した士族たちが求めて移住した。それは、明治七年にはじまる屯田兵制によって大々的に展開する。やがて未開の地に兵村ができ、屯田兵は開拓の先駆者の役割を果した。これらの士族の移住・開墾事業は、明治二十三年、政府が士族授産政策を打ちきるまで続いた。これを契機に、開拓の主力は、士族から農民へと移っていく。

農民の移住は、明治二十年代後半よりにわかに増加していったといわれるが、その中心となったのが小作人たちであったという。しかし、彼らは自作農をめざしたり、土地に愛着がなかったりで、多くは移住しても離散していったようである。こうした状況から打ち出されたのが、農民の団体移住を奨励する策であった。むしろ、北海道開拓の中核となったのはこの団体移民であったというくらい、よい成績をおさめていったといわれる。

明治二十五年に設置された貸付地予定存置の制度は、「府県知事の認可を受けた三十名以上の団体で、一カ年十戸以上ずつ移住する場合には、団体員一人につき五町歩の割合で総戸数に応じてむこう三年間貸付予定地を存置する」（『北海道の風土と歴史』）というものであった。こうして入植した団体は、苦労は多かったものの、精神的にまとまり、お互いに助け合いながら、困難をのりこえて成功していったものが多かったといわれ、数多くの団体の移住がみられたのである。

そうした団体の移住は、「大部分が生計困難をあげているが、そのほかに北海道の農業の経営が有望であること、独立自営農家になることを望んだこと。天災・治水工事などで土地を失ったこと、信仰を同じくする者が新しい部落をつくろうとしたこと」（前掲書）などが動機となっていたことが指摘されている。

このような社会的背景のもとに、団体移民の日宗＝法華村づくりもなされていくのである。特に日宗の場合は、移住者が農業の経営を夢みて移民することもさることながら、天災で土地を失ったこと、同じ信仰をもつ者が一致団結して新しい村の建設をめざしたことが、移住の大きな理由であった。

ところで、日宗＝法華村の建設は、当時の宗務総監佐野前励が北見方面の未開墾地三百町歩（一説には、二百町歩）の払い下げを北海道庁より受け、この要請で広瀬啓宣が団体長として山梨県・福岡県（厳密には、福岡県団体の団体長は広瀬啓宣ではないが、信仰の指導は団長として勤めた）の日蓮宗信徒を引きつれて、明治四十五年と大正二年に小利別に入植したことにはじまる。この時の佐野前励の心のなかには、信仰を同じくする法華村建設という一つの夢があったようだが、その法華村建設について、原田種夫氏は、佐野前励の生涯を語り伝える『佐野前励上人』（昭和四十一年刊）の中でこう書き記している。少し長いが、いとわず引用してみよう。

…（前略）…前励は宗門の一大農場を夢に描いたのだ。事業のための事業でなく、広漠の野に美しい農場をひらこう

という夢を追い…(中略)…前励が夢に描いたのは、純然たる共存共栄の法華魂を体した農夫だけを集めた現想的村落の建設であって最も進歩的、近代的な色調をおびている。思えば、武者小路実篤が、宮崎県児湯郡木城村石河内字城に「新らしき村」をひらいたのは、大正七年十一月十四日であった。かれは、新らしい社会をつくろうとした。そこでは皆が働ける時一定の時間だけ働くかわりに、衣食住の心配からのがれ、天命を全うするために金のいらない社会をつくろうというのであった。その上に自由をたのしみ、個性を生かそうということが理想であった。これは現実ばなれの空想部落として後に崩壊してしまった。この「新らしき村」に先駆したものが、前励の法華村であった。…(中略)…この大事業は着々とその実を挙げようとしたが、中途にして前励の遷化によって一頓座を来した。その後のことを筆者はよく知らない。

と述べている。佐野前励は、この事業を発願してまもなく大正元年九月、法華村移住者の大変な苦労がはじまった矢先に遷化するのであるが、遷化後まもなくしてこの法華村の開拓・開教事業は、日蓮宗評議員会の決議をへて宗門事業に移管された。佐野前励がどんな法華村の構想と夢をもっていたかは、今日知るよしもないが、武者小路実篤の「新らしき村に先駆した」「前励の法華村」は、先に結果をいってしまえば、過酷な自然条件・立地条件と過疎のために崩壊していったのである。われわれは、法華村の「一頓座を来した」後の実態を、二度の調査で、どうにかその軌跡を捉えることができた。

われわれは、農事指導嘱託員佐々木晴吉農業技手が、大正五年六月二・三両日の新来移民指導調査について、大正六年二月に北海道庁長官に提出した復命書を入手することができた。これによって日宗団体の入植まもない日宗村の状況をうかがい知ることができる。この復命書によると、移住してきたのは、

㈠明治四十五年四月十五日の移住者、

山梨県西八代郡豊和村　十五戸
秋田県仙北郡仙北村　二戸
宮城県宮城郡松島村　一戸

(二)次いで、大正二年四月二十二日の移住者、

福岡県朝倉郡三輪村　六戸
福岡県朝倉郡夜須村　八戸
福岡県朝倉郡秋月村　一戸

(三)引き続いて、大正二年四月二十三日の移住者、

福岡県朝倉郡夜須村　四戸
福岡県朝倉郡三輪村　三戸
福岡県築紫郡築紫村　四戸
福岡県嘉穂郡内野村　一戸
福岡県三井郡立石村　一戸

とあって、一年の内で四十六戸二三二名の入植者があり、ほかに単独で入植した者も十二戸ほどあったようである。このうち宮城県から一戸の入植があったが、小松寛静といい、説教所落成と共にその主任になっている。したがって、小松寛静は途中から山梨団体に加わった日蓮宗信徒か僧侶にちがいない。日宗村はまずこれらの団体で形成されたのである。これら団体の入植経過を知るのは甚だ困難であるが、われわれは、広瀬啓宣という人を調べることによって、山梨団体入植のいきさつを追跡調査することを得たのである。以下、山梨団体を中心に述べていく。

三

ここで問題なのは、なぜこれらの団体が小利別に入植しなければならなかったかということである。それにはまず、小利別が何故入植の地に選ばれたかであるが、それは、明治四十四年に網走本線(現在の池北線―池田町と北見市を結ぶ)が開通したからであった。最初は本岐(ぽんき)(現在、網走郡津別町本岐)というところに入植する予定であったが、鉄道の開通によって物資の運搬など交通至便なところの方がよいということで、急きょ、小利別原野に変更になったようである。その辺のはっきりした事情はわからないが、いま、本岐を訪れてみると、起伏のはげしい丘陵地帯である小利別に比べて、本岐は平坦地が多く、農耕地には、小利別よりはるかに適した地勢であることがわかった。広々と平地が開け、そこには土地いっぱいに作物がうるおっていた。これに比べて、小利別はいまだに原生林がみられる。はじめから本岐に入植していたら、あるいは開拓・開教は日宗村以上に発展していたかもしれない。小利別における日宗団体の開懇は、われわれの想像を絶する苦難があったようだが、小利別は、開懇するには、なにしろ土壌があまりにも悪かった。

明治四十五年四月十五日、山梨県西八代郡豊和村十五戸の家族が小利別に入植した。その家族構成は、平均六、七人であった。当時、両親に連れられて十歳で入植して今なお、過疎になった小利別に住んでいる、山梨県出身の楠田カズノさんの記憶では、小利別にはすでに七軒ほどの民家があって人が住んでおり、学校のようなものもあったという。楠田さんは、入植の一行十五の家族は、まずその学校に入って希望と不安の気持で一夜をすごし、翌日、むしろをかかえてそれぞれ山林に散っていった、と語ってくれた。

小利別は、明治四十三年、小沢一二・中根四郎十の二人の入植者によって開かれ、翌年、古賀千太郎・是安鋳作ら

の入植が続き、木材事業が興されていった。四十四年の網走本線の開通によってさらに入植する者があって、いくつかの木工所がつくられ、小さいながらも街が形成されるに至った。翌四十五年には、早くも陸別小学校付属小利別特別教授所（小利別小学校）がつくられるまでに発展した。林業を中心に街は活気にあふれ、大正七、八年頃より同十二、三年に至るピーク時には、戸数は二百数十戸に達したという。入植した時でも、小利別はかなりの人が出入りしていたようである。

団体長広瀬啓宣に連れられてきた山梨県豊和村十五戸の団体は、明治四十五年四月十四日午後八時三十分、小利別に到着、一行はまずこの学校に入って入植の第一夜を過したのであった。十一歳で両親と共に入植した村松伝治郎さんは、「四月だというのに、まだ雪が四尺も五尺もあったね。あのあたりは全くの原生林でトドやエゾマツのほか、ナラやタモ、センなど大木がびっしりでした」（「広報りくべつ」より）と当時の印象を語っている。入植した十五日は、彼らには忘れることのできない、記念すべき日となり、彼らは、毎月十五日を説教所（日蓮宗小利別説教所、入植してまもなく―明治四十五年―の創立）にて題目講を行なう日と定めたのであった。

四

では、山梨県豊和村十五戸が、なぜ移住してこなければならなかったのか。

団体移住の中には、天災・治水工事などで土地を失ったこと、信仰を同じくする者が新しい村をつくろうとしたことが動機となって、移住した団体があったことは、すでに述べたことであるが、山梨県豊和村十五戸の移住は、まさに天災によって土地や職を失ったことが最大の理由であった。

山梨県西八代郡豊和村はのちに大同村となり、現在は市川大門町に属している。市川大門町黒沢というところに、

宮沢寺という日蓮宗寺院がある。

われわれは、現在なおも日宗に住んでいる村松・今村両家や、かつて日宗に住んでいた当時を知る人びとを訪ね、会って話を聞くうちに、村松・今村両家が山梨県豊和村黒沢の出身であること、豊和村十五戸は豊和村黒沢から来たこと、そして十五戸は黒沢宮沢寺と妙学寺の檀家であったこと、広瀬啓宣という僧が彼らを引率してきたことなどがわかったのである。十五戸が同じ日蓮宗であることから、さらに追跡調査の結果、われわれは黒沢の宮沢寺にたどり着くことができたのである。そしてここに来て、団体長広瀬啓宣についても、その出生を知り得たのであった。

まず、広瀬啓宣についてふれておく。広瀬啓宣は、明治九年(一八七六)、山梨県東山梨郡の小学校長の息子(二人兄弟)として生まれた。父が宮沢寺に出入りしていたことが縁で、子供時代を宮沢寺で過ごした。やがて、宮沢寺住職小泉日扇の弟子となる。日蓮宗大学を卒業して山梨にもどったが、ここに若い者がいてもどうしようもないという気持をいだき、北海道開教をめざして北海道に渡っていった。宮沢寺の話では、すでに移住した山梨県の知人をたよって上川郡剣渕というところに入ったという。その頃、すでに剣渕には日蓮宗説教所があったが、ここの関わりは定かでない。しばらくして夕張郡由仁町の日蓮宗説教所に入り、明治三十八年三月に広宣寺と寺号を公称して開山となる。時に三十歳。広宣寺住職の時に、日宗団体の移住にたずさわることになる。大正元年十一月、日宗入植者と共に小利別説教所を建てる。そして説教所の実務を一緒にきた小松寛静にゆだね、広瀬は精神面と物質の面で入植者を援助していった。その後、大正四年に小樽の妙龍寺に移り住み、小樽大火で類焼した妙龍寺の復興に尽し、大正十三年、妙龍寺五世に入寺した。四十八歳の時であった。昭和四年、小樽の日蓮宗倶楽部を東山教会とし、美唄には法宣寺を開き、ついで中標津に教会所(現在、妙宣寺)を開いた。昭和の初めには北海道宗務所録司を勤め、昭和十九年十月十四日、六十八歳をもって寂した。この活動をみても、広瀬啓宣の開教の情熱がうかがい知れる。山梨団体が入植してか

らも、広瀬啓宣はよく面倒をみ助けてくれたという。

黒沢は、富士川をはさんで、鰍沢町の対岸に位置する。そこは、釜無川と笛吹川とが合流し、富士川となって甲府盆地のかなめより山あいに流れ入るところである。甲府盆地の扇状地のちょうどかなめの部分に当り、平地は少なく、山すそに多少の田畑がみられる程度、その地勢は今でも変わらない。黒沢の高台より村を見渡すと、平坦地のまことに少ないこと。そこに住む（明治期の）人の土地の広さの感覚からは、一人五町歩の土地は、まさにたなからぼたもちの気持にさせたにちがいない。そういう土地であったから、黒沢の人々は昔から生活の場を富士川に求めてきたのである。

長野や山梨の産物は、富士川を利用して静岡へ運ばれ、静岡の海産物は富士川をさかのぼって山梨に持ち込まれていたが、物資の運搬はすべて富士川を利用して船でなされていたのである。現在は、国道五十二号がその役割を果している。鰍沢や黒沢の岸には、いまでも船場というところが残っているが、当時の黒沢の半分以上がその船仕事に就いており、その大半が船頭をしていたという。当時、八〇〇そうからの船が富士川を行き来していたという。船大工は小さな舟をつくっては身延の七面山の池に奉納して安全を祈っていたほど、黒沢は船仕事でうるおい栄えていた。そういう人たちが開拓のため新天地に移住していったのだから、その苦労は想像を絶する。船方（ふなかた）の活気にわく黒沢は、やがて二度の天災に見舞われたのである。

明治四十年八月二十四日、関東一帯は大暴風雨に見舞われ、死者四五九人、全壊一四五〇戸、流失一八万七四九九戸の被害が出た。山梨県は、山くずれや富士川などがはんらんするなど、山梨県空前の大水害にみまわれ、その被害は死者二三二人、全壊・流失一万二〇〇〇戸、浸水一万五〇〇〇戸余り、流失した土地約七六〇ヘクタールにおよんだ。この大水害で、県の働きかけによって、被災者の間で開拓移民が募集、組織され、この時、四〇七戸が開拓移住

団（山梨団体）として北海道に渡っていった。この災害復旧が進められている時、再び大水害におそわれたのである。

明治四十三年八月十日、台風のため、富士川が再びはんらんし、大水害をもたらした。十六日に管長梨羽日鐶は関東・甲州地域水害救恤（きゅうじゅつ）の諭達を発して、日蓮宗全寺院に対し水害救助義損金勧募を呼びかけた。ただちに水害救援会議がもたれ、宗務院は水害慰問使を特派し慰問救恤活動を開始した。この時の水害救援で殊に注目しうる点は、宗務総監佐野前励が関東大洪水救恤対策を行なっていることである。いまは、この政策がどんな内容のものであったかは知ることはできないが、あるいはこの時、この水害を機に、被災者の移民団体を募って、払い下げられた未開墾地へ移住させ、法華信仰者の村をめざす新しい村づくりを具体化させたのではないか、時期が同じだけに、このように推測できるのである。ともあれ、二度の富士川のはんらんは、地域住民の生活に決定的な打撃を与えたのである。

黒沢の人々も、この二度の大水害のため、田畑や家屋が流失して生活の基盤を失い、困窮のどん底にたたされたのであった。この惨状を知った北海道夕張郡由仁の広宣寺住職広瀬啓宣が、宮沢寺と、同じ黒沢の妙学寺の被災檀家十五戸を移住団体として組織し、自ら団体長となって一行を引きつれ、小利別へ入植するに至るのである。この行動にも、広瀬啓宣の信仰の熱情がうかがえる。山梨団体入植と広瀬啓宣との結びつきは、これで明確になったのであるが、広瀬啓宣と佐野前励との関わりが、いまひとつはっきりしない。日宗の生き残った人たちは、広瀬啓宣と佐野前励が手をつくして助けたとは話してくれたが、開拓・開教の移住にあたっての二人の関係は定かでない。ただ考えられることは、大学を卒業し、開教をめざして北海道に渡り、わずか十年そこそこで一寺の開山となるほどの広瀬啓宣の力量と情熱を、佐野前励は知っていたのではないかということは想像に難くない。広瀬啓宣、その時三十四歳であった。

こうして十五戸の日蓮宗徒移住団は、着の身着のまま、一切の家財道具をもち、北海道へ行けば五町歩の土地がもらえる、木の株にのって種をばらまけばみのりがあるといういろいろな夢をいだいて、明治四十五年四月九日午後十

一時三〇分、甲府駅を後にしたのである。

一行がどのような経路で小利別に入ったかは、知るよしもないが、関係者から聞いた話を総合すると、こうである。黒沢からガタ馬車で甲府に出て、その日の夜行で発って翌日東京に着いた。十歳で連れられてきた人は、その時、もう東京に来ることはあるまい、と上野動物園に連れていってもらったことを語ってくれた。上野から青森に出、小さな青函連絡船に乗り、道中死ぬおもいで函館に着いた。北海道内では、いくつかの日蓮宗寺院に泊り、その度にはげまされたり、生活物資をもらったりして旭川の妙法寺に入ったという。そして黒沢を発って五日目、四月十四日午後八時三十分に小利別に到着したのであった。

このようにして山梨県西八代郡豊和村黒沢の法華団体は、開拓に夢を託して、明治四十五年四月十五日午後三時に小利別の「日宗」に入植したのである。

五

以上で、山梨団体の小利別日宗への入植経過の実態は、ほぼ明らかになったと思う。

日宗村生存者の記憶によると、小利別には山梨・福岡の他に、愛媛団体や兵庫団体も来たというが、いまは追跡することができない。また福岡団体についても、追跡調査し得なかったことは遺憾である。しかし福岡出身の生存者より若干の話を聴くことができた。

先の復命書には、福岡県からは大正二年四月二十二日十五戸、翌二十三日には十三戸、合計二十八戸の入植が記録されている。日宗で生まれた野下武雄氏の話では、九州団体は平山岩吉という法華信仰の人が団長となって二十四戸を引き連れて来て、のち三十戸に増えたという。単独で入地した者もいるから、九州団体は三十戸前後かもしれない。

山梨団体とは場所がちがい、市街から近く、日蓮宗説教所の周辺に入植したという。九州団体は来た人数によって土地の広さがちがって五町歩ではなく、十町歩であったらしい。九州団体は伐木して炭焼きをし、あるいは木工所に働きに出たりなどして現金が入るようになって、その半分以上が日宗を出ていったという。

福岡団体の入植は佐野前励亡き後になるが、なぜ入植したのか、いまはわからない。法華村建設のためか、農業経営のためか、あるいは天災が原因でか、全く見当がつかないが、どうも、入植者が信仰を同じくしていたということはいえそうだ。とするなら、福岡県朝倉郡三輪村や夜須村は、佐野前励の本仏寺とは距離的に近い位置にあることから、あるいは何らかの理由ではじめから法華村建設のためであったかもしれない。

いずれにしても、小利別原野は、農業経営をめざして開拓するには、あまりにも自然条件が酷し過ぎたのであった。

二、日宗法華村の実状

望月兼雄
（現代宗教研究所員）

資料にみる日宗の開拓生活

北海道足寄郡陸別町は、十勝地方の北東端にあり、北緯四三度二七分〜三八分、東経一四三度二七分〜五七分に位